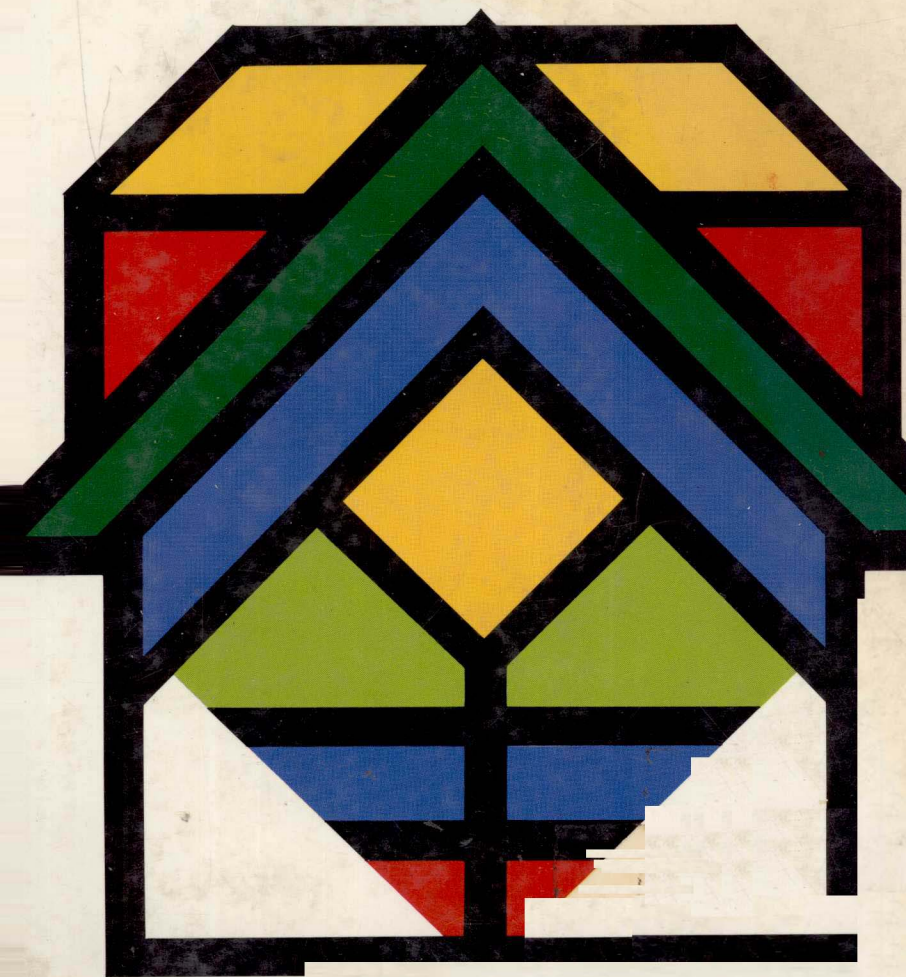


すぐ役立つ

商店簿記入門

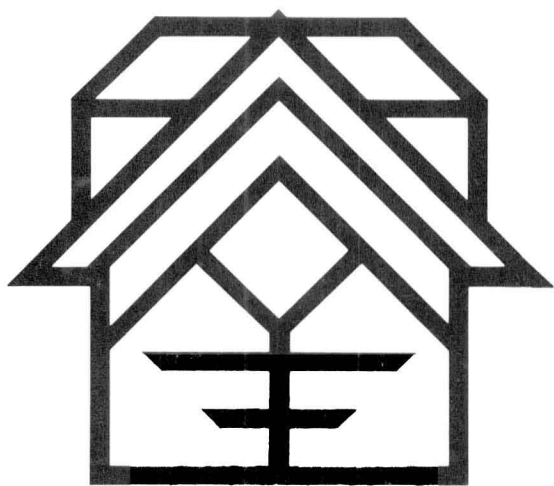
鶴田彦夫 著



すぐ役立つ

商店簿記入門

鶴田彦夫 著



実業之日本社

は し が き

いまや、簿記は現代人の必須の知識であり、わたしたちが自らこの簿記を利用して、家計や企業を動かしたり、逆に個人商店や会社などが簿記を使って作成した決算報告書を読み、経営内容を理解することなどが要請される時代です。

とすれば「簿記はわかりません」と逃げるわけにはいかないのです。

簿記は一見とつつきにくいかもしれませんが、実は何といっても平凡な技術なのです。早い話が帳面に数字を書き込むことから始まります。

みなさんが、いつもなさっていることの一部が簿記なのです。それほど簿記は簡単なもので、簡単なだけに非常に合理的でもあります。

そこで、これから簿記を学んでいこうということになりますが、簿記を学ぶということは、簿記の約束ごとを知り、約束ごとにしたがって営業活動をどのように処理していくかを理解することです。

この本は、簿記を初めて学ぶ方、また、すでに商店の経営にたずさわっている方々のために、簿記の基本から始めて、短期間で簿記のひととおりが理解でき、整理できることも目的としたものです。

このため、とりあげる内容も、より実務に添ったものを中心に、豊富な取引例を使って説明してあります。気楽に読んでいけて、しかも実務に役立つよう考えて書きました。

しかし、簿記は読んでわかったというだけでは駄目です。自分で問題などをやってみて自分の手で覚え

なければなりません。

この本には、例題や練習問題を数多くのせてあります。理解を高めようとするページに記入用紙をはきみ、なんども試みてください。

そうすることによって、いつの間にかマスターするものです。

付録のひとつに「個人企業のための青色申告記帳」をとりあげてみました。この本を通じて商店簿記の基本を理解したあなたが、商店の経営と税務に複式簿記で立ち向かうよう望んでいます。今日のように取引が高度化し複雑になってくると、複式簿記による青色申告がいかに記帳しやすく、わかりやすいものであるかを知ることでしょう。

この本が商店経営の記帳に、また、これから簿記を学ぶ人のためにお役に立つことができれば幸いです。

最後に、本書を刊行するにあたって終始、編集に協力された第二出版部長の芝崎 正氏その他、編集部
の皆さまに対し厚くお礼を申し上げます。

昭和五十三年六月

著 者

もくじ

は し が き	3
1 簿記とは何か	9
1 単式簿記と複式簿記	9
2 簿記の五要素とは	11
3 取引と勘定について	15
2 仕訳から決算準備まで	19
1 仕訳帳と元帳	19
2 試算表と精算表	25
3 決算(その一)	30
1 大陸式決算法と英米式決算法	30
4 各種の勘定科目(その一)	38

1	現金と預金の扱い方	38
2	資金を圧迫する債権・債務	46
3	商品売買の記帳法	49

5

各種の勘定科目（その二）	60
--------------	----

1	手形取引	60
2	固定資産と減価償却	67

6

費用・収益の勘定	78
----------	----

1	やり玉勘定	78
---	-------	----

2	金利負担の影響	87
---	---------	----

3	総合問題（その一）	97
---	-----------	----

※	この辺でひと休み（記帳に関するうえでの注意）	102
	製品原価は出しにくい（原価計算のあらまし）	105

7

決算（その二）	110
---------	-----

1	期間配分の妙	110
---	--------	-----

2	支出しても資産	117
---	---------	-----

3	ハケタ精算表をつくる	119
---	------------	-----

4	利益を処分する	124
---	---------	-----

8	さまざまな引当金.....	129
9	報告書の作成.....	133
10	報告書の用途.....	145
11	上級への道.....	154
	1 簿記のおわり.....	145
	2 所得と税金.....	147
	3 青色申告をしよう.....	150
	1 転記の手間を省略.....	154
	2 売上げを伸ばすもの.....	158
	3 伝票会計利度について.....	163
	4 総合問題(その二).....	181
	付 録.....	195
	△1▽ 勘定科目の整理.....	195

2	1	減価償却資産の償却率表(抄)	204
3	2	おもな減価償却資産の耐用年数	206
4	3	単式簿記で開業するには	217
		みなし法人課税の損得	225
4	4	個人企業のための青色申告記帳法	226
	1	青色申告できる者	226
	2	青色申告で備えなければならない帳簿	227
	3	青色申告をするための手続き	227
	4	青色申告のおもな特典	228
	5	正規の簿記イコール複式簿記	232
	6	税金対策より経営に使う記帳	233
		(青色申告決算書の費用科目)	
	7	事業所得の決算	240
	8	確定申告書の作成	244
	9	修正申告と更正・決定	246
10	10	青色申告決算書と確定申告書の記入例	250
さく		さくいん	262

Ⅰ 簿記とはなにか

1 単式簿記と複式簿記

◆福沢諭吉の帳合之法

簿記には単式簿記と複式簿記とがあります。単式簿記は、もはや今日では簿記というには余りにも不完全で問題になりません。ですから、ふつう簿記といえは複式簿記のことです。

明治六年から七年にかけて慶応義塾の創立者として有名な福沢諭吉は『帳合之法』初編二冊・二編二冊を公にしています。初編は単式簿記、二編は複式簿記となっています。

複式簿記について『帳合之法』は次のようにのべています。

「ドウブル・エントリイは、同じ高の貸借を大福帳へ二重にも三重にも控えて互いに平均する趣向なるゆえ斯く名づけたるなり。——故に二重控の式などと翻訳せば原書の意に当らんか」

ドウブル・エントリイは Double Entry（複式記入）のことです。このように複式簿記の複式という言葉は、二重式とか二段式とかいう意味で、単式簿記と比較して使っているわけです。

$$\text{期末正味財產有高} - \text{期首正味財產有高} = \text{当期純利益}$$
$$\begin{aligned} \text{期末正味財産有高} - \text{期首正味財産有高} &= \text{当期純利益} \\ &\text{財産法（財産計算）} \\ \text{期末総収益} - \text{当期総費用} &= \text{当期純利益} \\ &\text{損益法（損益計算）} \end{aligned}$$

(財産計算)

当期総収益		期末正味財産有高	
当期総費用	純利益	期首正味財産有高	純利益
	↑		↑

単式簿記は事業を行なう過程で発生する金銭の収支や債権・債務の増減、商品の売買などのような、財産の変動だけを記録・計算して、上の式一によって示される方法で、最後の純利益を求めようとするやりかたをいうのです。

すなわち、複式簿記のように一対の貸借平均記帳（二面記帳）を行なわないで、單純に、期首と期末の有高を比較するだけであり、早い話が、結果だけに頼ろうとするものです。その期間内に発生した細かい収益（店に入ってきたお金）や費用（店で使ったお金）については、なんら考慮が払われていません。収益や費用がどのようにからみ合つて、最後の純利益がもたらされたか、そのすじみちがわからないところに大きな欠陥があります。

これに反して複式簿記では、単式簿記でとりあげた財産の変動のほかに、資本の増減や、費用・収益の発生・消滅に係る事項もとらえて、それら両方面の記録・計算をしていこうというのです。しかも、これが一定のルール（後述）にしたがって、一糸乱れず処理されるところに特徴があります。複式簿記の

方法は式2に示す二式によって示されます。

この式を、図に示しますと図2のようになります。

複式簿記は、損益計算と財産計算の二面計算が行なわれ、その双方から算出される純利益は同額となります。この金額の一致によって、記録・計算の正しいことが自然にわかるところに、その使命があるのです。

さて、このへんから本文に現われた簿記上の用語を若干、説明しましょう。

財産とは 簿記における財産は、世間という財産とは多少のズレがあります。土地・建物・金銭・商品などのほかに、よそに対する貸しなどの資産のほか、借入金や未払いの掛代金（買掛金）などの負債もすべて財産といっています。世間一般に呼ばれている財産は資産を指しており、簿記の財産は資産と負債の全く毛色の変わった二種類の財産があるのです。ですから、借金一〇〇万円のほかビタ一文もない素寒貧でも、一応、財産が一〇〇万円ということになります。

財産 { 資産（積極財産）……土地、建物、商品など
負債（消極財産）……借入金、買掛金など

取引とは 取引という言葉は、日常だれでも使っていますが、簿記で取引という場合は、ふつう使われている取引という言葉とは多少意味が違います。

常識では、取引といえば品物を売買することを指しますが、簿記では「財産が増えたり減ったりすること」のすべてを取引といいます。そして簿記上は取引であればどんな取引でも、これをお金の単位によって示して取り扱うのです。

2 簿記の五要素とは

◆簿記の土台となるもの（貸借対照表と損益計算書）

表 1

貸 借 対 照 表

期末資産…	現 金	8,200	借 入 金	15,000	………	期末負債
	商 品	53,000	資 本 金	40,000	………	期首資本
	備 品	1,800	当期純利益	8,000	………	純 利 益
		63,000		63,000		期末資本

式 3

資産－負債＝資本………資本等式

式 4

資産＝負債＋資本…貸借対照表等式

式 5

当期総収益－当期総費用＝純利益

式 6

当期総費用－当期総収益＝純損失

商店や会社では、商品の売買、金銭の出入、従業員の雇入れ、重役会議の開催など、いろいろなことが、つぎつぎと起きてきます。これらの営業活動を記録すべき事項が、すなわち簿記の対象としてみますと、資産・負債・資本・費用・収益という五つの要素に増減をひき起こすことになるものです。

前の説明の中で、財産は資産と負債であるといいましたが、この資産と負債から資本が導かれます。(式3)

この資本は、ややつかみどころのないものですが、店や会社の本当の意味での財産額なのです。資本のことを正味財産ともいいます。

なお、店や会社の財産状態を表わすために、簿記では貸借対照表を作成します。前記の資本等式の負債を右辺に移しますと、簿記ではきわめて重要な貸借対照表の原型である式4のような貸借対照表等式ができ上がります。

上に掲げた簡単な貸借対照表(略式)を見てください。

貸借対照表は、上の表1で表わされていますように、左側にもろもろの資産項目とその金額を、右側にもろもろの負債項目とその金額および資本とその金額を書き並べて、左右の合計金額が等しいことを示した表です。

つぎに、損益計算について話を進めていきます。

簿記では、しばしば損益という言葉が使われますが、これ

1 簿記とはなにか

表 2

損 益 計 算 書			
費 用	給 料	16,000	受取手数料 33,000……收…益
	通信交通費	4,000	
	支払家賃	5,000	
	当期純利益	8,000	
		33,000	33,000

(注) 損益計算書の純利益額は、ふつう赤字で記入される。

は、損費（費用・損失ともいう）と収益（利益ともいう）の二語を圧縮したものととって結構です。

ここで損益について、さらに大事なことをつけ加えておきたいと思いますから、しっかり頭に入れておいてください。それは、費用が発生すればそれだけ資本は減少し、収益が増加すればそれだけ資本は増加する結果となるということです。

見方を変えますと、資本の増加の原因となるものは収益で、資本の減少の原因となるものは費用ということです(式5)。

式5の右辺の当期純利益に相当する分だけ、営業期末の資本は大きくなるか、式6のようになって、資本が純損失分だけ減少するか、いずれかにおちつきます。

さて、これらの費用・収益の項目と金額を左右に書き並べて店の費用・収益の発生状況と純損益の額を明らかにした報告書を損益計算書といい、さきに学んだ店や会社の財産状態を示す貸借対照表とともに、簿記の重要な報告書となっています。

上に簡単な損益計算書(略式)を掲げました。

なお、貸借対照表で示される純利益額または純損失額と、損益計算書で示される純利益額または純損失額とは、同じものを財産法と損益法の二つの方法で算出したにすぎませんから、必ず同額(例の場合は八、〇〇〇円)となります。しかし、示される側は反対となります。

◆財産・損益の項目を整理すると

簿記上の取引は、つねに簿記の五要素（資産・負債・資本・費用・収益）に変動を及ぼしています。

資産——現金（手持ちの通貨、よそから受け取った小切手、郵便為替、振替貯金の払出証書など）・預金・売掛金（商品売った代金が貸しになっているもの）・商品・受取手形（売上代金として受け取っている手形で支払期日のきていないもの）・貸付金（売上代金以外の取引先その他の対する貸金）・有価証券（店の持っている他の会社の株式や公債、社債などの証券）・備品（机、椅子、金庫など）・土地（営業用に使っている土地）・建物（営業用に使っている店舗や事務所、倉庫などの建築物）……など。

負債——買掛金（商品を買った代金が借りになっているもの）・支払手形（仕入代金として振り出している手形で、まだ支払期日のきていないもの）・借入金・未払金（商品仕入代金以外の品物などの代金で、まだ支払っていないもの）……など。

資本——資本金または元入金。

費用——給料・広告料・地代・家賃・消耗品費（事務用の帳簿、文具などにかかる費用）雑費・旅費・交通費・通信費・支払利息（借入金に対して支払う利息）・公租公課（税金や協同組合の費用など）……など。

収益——商品売上益・受取手数料・受取利息……など。

◆取引の二重性について

いま、三万円の机を買ったと仮定します。家計簿では支出欄に、机三万円とだけ記入します。ところが簿記では、お金だけでなく品物の増減も問題となりますから、机という店の備品（資産）が三万円分だけ増え、お金という店の現金（資産）が三万円だけ減ったと考えるのです。

ついでにもう一つ、他人に三万円のお金を借りたという場合を考えてみますと、家計簿では収入欄に借金三万円と書きます。ところが簿記では、三万円だけ他人からの借金という借入金（負債）が増えると同

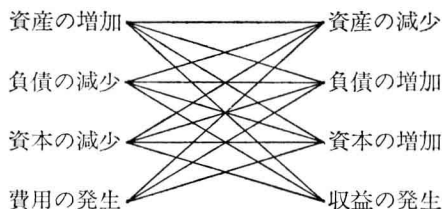
◆勘定・勘定科目というもの

取引が発生しますと、その取引が資産・負債・資本・費用・収益の、どれとどれに増減変化をもたらすか、ということをよく考えて、分類・整理しなければなりません。

この資産・負債・資本・費用・収益というものは、前に説明したように、それぞれ細かい項目にわかれています。これらの現金、商品、売掛金、資本金などの細かい項目を勘定（かんじょう）といい、同種類・

3 取引と勘定について

図2



時に、店としては、お金という現金（資産）が三万円だけ増えたと考えるのです。これは、

資産の増加——資産の減少……前者の取引関係
資産の増加——負債の増加……後者の取引関係

となります。

これらの変動は、資産・負債・資本・費用・収益の間に相対立する関係を起こさせて、その一对の対立関係に立った双方の金額は相等しいという事情が生まれるのです。これを取引の二重性と呼んでいます。

この取引の二重性、すなわち取引の対立関係を、いろいろの場合を考え合わせて図示してみますと、上の図2のようになります。

この対立関係には、いろいろの組合せがあって、いつも一対一ばかりとはかぎりません。しかし、その左右の金額それぞれの合計は必ず同額であることが必要です。

同性質の項目ごとに増減を記録・計算します。

この記録・計算の単位となっている勘定の名称、たとえば、現金勘定、商品勘定、資本金勘定などを勘定科目といっています。

帳簿面で記録・計算の行なわれる場所のことを勘定口座（帳簿）といいます。勘定口座の左側を借方（かりかた）・右側を貸方（かしかた）と呼んでいます。

実務においての勘定科目は営業の規模の大小、取引口数の多少に応じて、その営業に適するものを定めて用いる必要があります。取引をこの勘定にわけて、勘定科目の名前をつけて処理することを仕訳（しわけ）といいます。仕訳についてはあとで説明します。

勘定口座の左側・右側を借方・貸方と呼ぶと書きましたが、これは勘定口座の場合だけでなく、一般に簿記では、よく左側と右側とに対立させて書くことがあります。

そうしたとき、いつも、左側を借方、右側を貸方とよんでいます。この左側・右側の代わりに借方・貸方という簡単なことがらを、とくまちがいやすいのですが、さて、あなたはどうか。

◆簿記式計算の方法と記入例

簿記式計算の方法によると、

- (1) 簿記の計算はプラスとマイナスである。
- (2) これを記録・計算するのに勘定口座を用いる。
- (3) 勘定口座は紙面が借方側と貸方側とに区別されていて、借方側に増加を書けば貸方側に減少を書き、残高は増加の合計を差し引いて計算するものである。

このように、借方と貸方とは正反対の意味を持っていますから、いずれか一方へ

借 方	貸 方
-----	-----

※ 勘定口座の左側を借方、右側を貸方と呼ぶ。